


1 作 物

項 目	作 業 内 容
<p>(1)水稲の水管 理</p> <p>(2)水稲の台風 対策</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <p>水稲の水管理 水稲の台風対策 短期あきたこまちの収穫・乾燥・調製 大豆の灌水 大豆の病虫害防除</p> <p>水稲の根の活力を生育後期まで維持して登熟向上を図るため、出穂後は間断灌水を行う。用水の豊富な地域では掛け流し灌水も有効である。登熟中期以降は、徐々に水量を少なくしていくが、9月は気温が高めとの予報であり、登熟期の気温が高い場合、乾燥気味の間断灌水で土壌が乾燥すると高温障害による白色未熟粒の発生を助長するので、決して田面を乾かせないようにして土壌水分を保持する。</p> <p>米の品質向上のためには、落水時期をできる限り遅くし、収穫前5日程度を目安にする。9月中旬に収穫する短期栽培のあきたこまち等では、まだまだ気温が高い時期であり土壌が乾きすぎると胴割れ等の発生で品質が低下する。</p> <p>9～10月に襲来する台風は大型化することが多く、襲来すれば登熟期を迎える水稲への影響が心配されるため、事前事後対策を徹底する。</p> <p>ア 台風が接近したときは、穂や茎葉の損傷を防ぎ、穂の脱水症状「白穂」(写真1)を軽減するため、できる限りの深水にして通過に備える。</p> <p>イ 台風が遠い場合でも、乾燥した強風(フェーン現象)により脱水症状(青枯れ症)になることがあるので、風が強い場合は必ず湛水する。</p> <p>ウ 通過前後に多量の降雨がある時は、水路に流されて人命に関わる事故の恐れがあるため無理な水管理をしない。</p> <p>エ 塩水が水田に流入した場合は、早急に真水の掛け流しを行い、土壌中の塩分濃度を0.5%以下に下げる。</p>



写真1 台風による白穂

項 目	作 業 内 容
(3)短期あきた こまちの収穫	<p>オ 潮風害を受けた場合は、動噴等を用いて早急に稲体に付着した塩分を真水で洗い流す。</p> <p>カ 台風通過後も強風が吹く間は深水とし、風が止んでから浅水管理にする。</p> <p>キ 倒伏して穂が地面に着いている水稻は穂発芽を防ぐため、落水するとともに軽く引き起こしたり、結束したりして株を地面から離して穂の乾燥に努める。</p> <p>ク 収穫間近で倒伏した水稻はこれ以上の登熟が見込めないばかりでなく穂発芽しやすいので、できる限り早く収穫する。</p> <p>ケ 台風通過後は白葉枯病、いもち病、ウンカ等の病虫害防除を行う。</p> <p>9月は短期栽培あきたこまちの収穫時期となる。今年の出穂はやや遅く、今後の気温は平年並かやや高いとの予報から、収穫期は平年並み～やや遅くなると予測され、早刈りや刈遅れで品質が低下しないように適期を見極めて収穫する。</p> <p>収穫適期は、生育中庸な株の最長稈における黄変籾率で判断できる。短期あきたこまちではそれが85%に達した時期から収穫ができる。出穂期からの日数では33～38日、出穂期後の積算温度では850～1,050である。</p> <p>刈取り適期の適否は、米の品質・食味を大きく左右するため、水稻の熟れ具合と天候を判断しながら適期収穫に努める。</p> <p>また、籾水分30%以上の高水分刈りでは品質低下しやすいので、これ以下で収穫するのが望ましいが、雨が続いてやむなく高水分刈りするときはコンバインの回転数をやや落として収穫する。</p> <p>また、この時期はまだまだ気温が高く、生籾を堆積すると蒸れて変質しやすいので速やかに乾燥する。</p>
(4)大豆の病害 虫防除	<p>大豆栽培で今後重要なのがカメムシ類やハスモンヨトウ等の病虫害防除と開花期以降の灌水である。</p> <p>ア ホソヘリカメムシ、アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ等の吸実性のカメムシ類は、大豆の若莢を吸汁加害して落莢させるため減収程度が著しい。収穫時の「青立ち大豆」(写真2、落葉せずにいつまでも茎葉が青い大豆)はこれが原因である。また、子実肥大後期に吸汁されると奇形粒となり品</p>

項 目	作 業 内 容
(5)大豆の灌水	<p>質が著しく低下する。防除は開花終期から子実肥大期に2回程度行い、発生が多い場合は追加防除する。</p> 
	<p>写真2 カメムシ被害の青立ち大豆</p> <p>イ ハスモンヨトウ ハスモンヨトウは集団で葉を食害し、被害が著しい場合は葉肉がほとんどなくなり、同化能力が著しく悪化して品質・収量を低下させるので防除の徹底が必要である。 防除は若齢幼虫による集団加害葉（白化葉）の発生直後から始め、必要に応じて追加防除するが、老齢幼虫になると食害量が増えて被害が増大するばかりでなく、夜行性になることや感受性が低下して防除が著しく困難になるため、若齢幼虫のうちに防除することが重要であり、薬剤抵抗性が発生しやすいので作用性の異なる薬剤をローテーション使用する。</p> <p>ウ 紫斑病 紫斑粒を発生させて品質を低下させる紫斑病は、子実肥大期の高温・多雨条件で多発する。開花後30日頃の子実肥大期の防除効果が高く、この時期の前後に2回程度防除する。従来、一般的に用いられてきたトップジンM剤等のベンゾイミダゾール系薬剤に対する耐性菌が県下の広範囲で確認されているので、防除にはこれとは系統の異なる薬剤（ベルコート剤等）を用いるのが望ましい。</p> <p>大豆は要水量(乾物1g生産するのに必要な水量)が高い作物(図1)で、特に水分不足は落莢や不稔莢が多くなって収量が低下するばかりでなく、実が付かないことで栄養成長と生殖成長のバランスが崩れて、莢が熟れても落葉が大幅に遅延する「莢先熟」を招くことになる。大豆栽培では、開花期以降は収量向</p>

項 目	作 業 内 容												
	<p>上のために積極的に灌水する。</p> <p>特に開花期以降に 10 日以上無降雨が続いた場合、土壌が白く乾き日中に葉が反転するようになる前に畦間灌水する。高温時の灌水は根傷みを起こすので、朝夕の涼しい時期に短時間で実施する。中途半端な灌水は逆に減収を招くので必ず子実肥大後期まで行う。</p> <div data-bbox="571 593 1284 1064" data-label="Figure"> <table border="1"> <caption>作物の要水量(乾物1g生産に必要な水量)</caption> <thead> <tr> <th>作物</th> <th>要水量 (mm)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>イネ</td> <td>300</td> </tr> <tr> <td>トマト</td> <td>80</td> </tr> <tr> <td>レタス</td> <td>180</td> </tr> <tr> <td>キャベツ</td> <td>180</td> </tr> <tr> <td>ダイズ</td> <td>580</td> </tr> </tbody> </table> </div> <p>図 1 各作物の要水量</p>	作物	要水量 (mm)	イネ	300	トマト	80	レタス	180	キャベツ	180	ダイズ	580
作物	要水量 (mm)												
イネ	300												
トマト	80												
レタス	180												
キャベツ	180												
ダイズ	580												